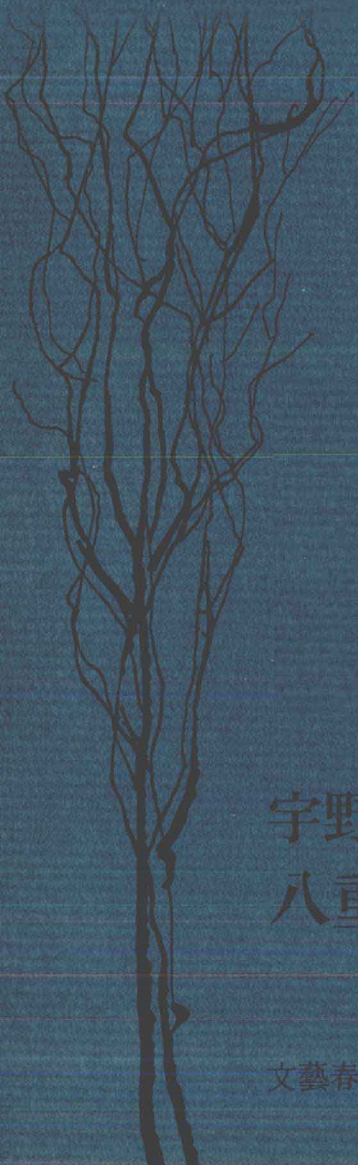

宇野千代著

八重山の雪

文藝春秋刊

八重山の雪　奥附
昭和五十年十月十五日　第一刷
著者　宇野千代
装幀插畫者　三井永一
發行者　樫原雅春
發行所　株式會社文藝春秋
東京都千代田區紀尾井町三番地
郵便番號一〇二
電話東京(〇三)二六五局一二一一
本文・插畫印刷　理想社印刷所　製本　矢嶋製本
附物印刷　精興社　製函　加藤製函
萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします
© Chiyo Uno 1975　Printed in Japan

目次〈八重山の雪〉

八重山の雪……5
故郷の家……105
日露の戰聞書……135
手押し車……241
あとがき……251
收錄作品初出一覽……254

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

八重山の雪

宇野千代作品集

八重山の雪

その一

いまになつて思ひますと、自分にも自分のしましたことが何やつたのやら、ようは分らぬ心持でございます。ほんに、若い娘の頃のことであつたとは申しましても、眼色毛色の變つたお人を、好きにならうやなんぞと言ふことが、あるもの

でございませうか。いえ、確かにしかと、好きやと思ひましたとは、自分にも覺えのないことでございますが、のちに、お父が私に向ひて、「われや、しんからのいたづら者やな、」言うたことがございます。ほんに自分でも、自分は生れついてのいたづら者や、とさう思ふほかはございませぬ。

戰がすんで、二年ほどした頃のことでございました。松江の町にも、敦賀の港から、英國の海兵隊が上陸して參りました。或る朝のことでございます。店の前の往還を掃いて了うて、水を撒き、私が奥へ這入らうとしてをりますと、「もし、もし、」あの尻上りのものの言ひ方で、聲をかけた兵隊がございます。兵隊を見かけましたのは、このときが始めてではございませぬ。うちの店へも、よう酒や罐詰なぞ買ひに來てをりましたので、聲かけられたりしましても、もう、恐しいなぞと思うたりしてはをりませぬ。「はい、」と口の中で言うて顔をあげますと、あの、うす色の眼を開いて、私を見ましたときの、子供のやうにあどけない顔つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

きが、いまも眼に殘つてるのでございます。

ほんに、このときの思ひがけない心持は、あれは何でございませう。誰が見ましても、獣のもののやうに恐いものやと言ふ、あの兵隊の顔が、細こいことは分りませぬが、何やら優しいもののよに思へたと言ひますのも、これも私がいたづら者であつた證據やと思はれてなりませぬ。

はい、自分の手で酒を飲むよな格好して見せましてなア。あれはウィスキーを買ひに來たのやなと、私にもよう分つたのでございます。これまでに、ただの一度も私が、兵隊にもの賣つたりしたことはございませぬのに、そのときばかりは店に驅け戻つて、品物を渡してやつたのでございます。

「はる子がウィスキー賣つたぞよ、お母、」と、信吉が大きな聲して言うたのでございます。「兵隊にもの賣つて、錢勘定、間違へさんすなや、」と臺所から、信吉のお母の言ふ聲が聞えました。

はい、私がこの家へ來ましてから、まだ二た月とは經つてをりませなんだ頃のことでございます。どこぞの國にあるとか言ふ、足入れ婚とやらではございませねど、信吉とまことの夫婦になりますまでに、半年がほどは、この家のしきたりに馴染むのやと言ふことでございまして、津田村のわが家から、ここへ私は預けられてたのでございます。

何かと言ふと信吉は、「俺ア、はる子を見初めたのや、」と冗談のよに言ふのが口癖でございましたが、在所の家からこの家の前を通つて、學校へ通うてました私を、信吉は毎日のよに見てたのや、と言ふことでございます。本家のおばばさまの口利きで、どうでもと言はれまして、この家へ貰はれて來たのでございますが、在所の家にお父とただ二人で暮してをりますより、賑やかな町の中へ貰はれて來たのんが、何やら、嬉しかつたと言ふやうな、ほんに他愛のないことやつたのでございます。

信吉は大阪の關西大學を中途で止めて、いまではこの店の一切をとりしきつてたのでございます。戦がすみますとすぐ、學徒動員とやらが解除になりまして、ちやうどその時分に、この家のお父がお死にたからでございます。私の口から、かう申しては何でございますが、信吉は色の白い、眉毛のきりつとした、笑ふと眼を絲のよに細うしますのが癖でございまして、人に向ひて腹を立てると言ふことがなかつたのでございます。「はる子はあれを馬鹿にしよつて、」と、のちにお母がお言ひたと言ふことを聞きましたが、ほかの男を好きになつて、逐電したりしましては、どう言譯が立つものでございませう。みな、私ひとりのいたづらで、あのお人には關係ないことでございます。ほんにこのときの私の氣持は、誰にも合點の行かぬことであつたらうと、さう思ふのでございます。

その日からあと、一と月も經ちましたやろか。その間も毎日のよに、あの兵隊は何やら買ひに店へ來ましたので、のちには信吉まで、「彼奴ははる子に惚れて、

いりもせんものまで買ひに通うとるぞ、」と言うたりしましてなア。小僧の正太は正太で、そのたんびに店の戸口に立つて、「若ごりよんさん、來ましたでエ、」と私を呼ぶのでございました。始めの中はこの兵隊のことを、みなで笑うてをりましたが、その中に、「ありやア、よつぽど分限者の息子ででもあるかいな、」と言うたりしましてなア、何やら、恐いものでも見るよにするのでございました。

それと言ひますのも、人の話に、英國の兵隊は手當てが少いとのことでございますのに、ときには一どきに、ウィスキーを半ダースも買うたりして、わざとに、重い重いと言ふ風をして見せて、歸つて行たりするのでございました。

はい、名前がジョージと言ふことまで、その時分には、分つてたのでございます。ほんたうの名は、ジョーン・ヘーデンとやら言ふのやさうにございますが、何ででございましたやろ、ジョージとたださう呼んでたのでございました。私とジョージの間で、二人きりで話をしませうにも、何せ、私どもの學校時分には、

敵性の言葉やと言ふことで、英語は廢止でございましてなア。ジョージの手眞似に片言の日本語を混ぜましたあの話が、あれで、どうして用が足りましたのやら、どんな話の一つも、聞き洩らすよなことはなかつたと思ひます。

人を好きやと言ふことくらゐ、奇妙なものはございませぬ。そのをかしげな身振り手振りや片言まで、私には何やら、愛しいものに思はれたのでございます。

「ははははは、彼奴はお前を、俺の女房になる女やとは思はいで、この店の娘やと思うとるのやないか。」と或るとき信吉が申しました。何にも知らないジョージのことを、笑うて言うたのでございますが、このときの私の氣持は、あれは何と言ふのでございませう。女房になる女やと決めてゐる信吉の方を、不思議やと思ふよになつてたのでございます。

はい、信吉と私とは、まだほんたうの披露をした仲ではございませんので、夜も別々の部屋に寢てましたのでございます。寢しなになぞ、私が髪を梳かしてを

りますと、信吉が窓際に腰かけて、何とはない話なぞしかけてをりますと、「信吉、早うに自分の部屋で寢んかいな、」と、決まつたやうに、お母が聲をおかけるのでございました。

披露をしますまでは、何でもなうしてるのがええと言ふことくらゐ、信吉にも私にも、よう分つてをりますのに、いつでもさうして、そとから聲をおかけるお母のことを、何やら私は、うつといしいよに思うてたのでございます。

「お前の別口の錢、今日で何ぼほどになつたのや、」と、信吉はときどき、そつと私に訊くのでございました。この家へ來ましてから、十日ほども經つた或る日のことでございましたが、店のことを覺えるには、その日の賣上げを帳面につけ、帳面と金庫の中の現金とを合せて、間違ひがなかつたら、金庫をしめるのやと言ふことで、信吉は私に、金庫のしめ方、あけ方を教へたのでございます。そして、「これ、お前の別口の錢や、」と言うたりして、私の手にお札を一枚、握らせたの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.